

野田の伝統や文化を切り絵に

野田ならではの伝統や文化を、切り絵で表現している荒井義守さん。自分の生まれ育った地域の素晴らしさを、次の世代にも伝えていきたいと、日々創作に励む荒井さんにお話を伺いました。

独特のタッチで

野田の素晴らしさを表現

野田市の中心市街地は、昔から「上町」「中町」「下町」の3区に分かれ、地域で行われる夏まつりにも毎年交代で当番を決めて係わってきました。上町で代々足袋店を営んでいる荒井さんも、子どもころから地元の伝統や歴史、

文化などにふれて育ってきました。

「先代は足袋を作る職人でしたが、時代が変わり、今は足袋以外の商品も扱いますね」と店の奥にある荒井さんの席には、先代が使っていた足袋を作る

道具と小さな作業台が置かれています。ここが現在の荒井さんの「創作の場」でもあるのです。

「店番をしながらでも、ふっとアイディアが浮かぶと、すぐにここで切り絵を始めます」幼い頃から物を作ることが大好きだった荒井さんが切り絵を始めたのは、50歳代半ばになってから。偶然、テレビで見た切り絵の講座がきっかけでした。「道具も材料もみんな身近にあり、手に入れやすいものばかりなので、これは自分にもできそうだ」との思いで、いろいろな手法を試しながら身につけた自己流だそうですが、デザインカッター1本を巧みに使い、下絵を描いた黒い紙を切り抜いて、独特なタッチで表現していきます。



荒井 義守さん

荒井さんの切り絵には、ふるさと野田をこよなく愛する温かさが伝わってきます



つく舞は

地元ならではの民俗行事

荒井さんが作品の題材に取り上げるのは、毎年7月中旬ごろ開催される三ヶ町夏祭りやつく舞をはじめ、年中行事など次の世代にも伝え続けたい「伝統」や「心象風景」です。

「しかし、鯉のぼりを描いても、今はこの近所では鯉のぼりを立てる家がなくなってしまう。菖蒲湯を描いても、若い人たちに意味が伝わるかどうか…」

